

佳作

テーマ：やさしさと社会、そしてわたし 「やさしさの形」

東京都・大妻高等学校2年 浅香友貴

私は将来、看護師になりたい。看護職はいわゆる一昔前の白衣の天使のイメージは壊れ、昨今では離職率の高い職業となっているのは事実だ。しかし困っている者を助け、共に生きていきたいという思いのもと、私の中で看護師になりたいという思いは変わらずに存在している。そこで看護師の仕事を知りたいと思い、高校一年生の時私は看護体験に参加した。以前、私は患者さんのために自ら動ける看護師になりたいと考えていたが、体験を通して私の目指す看護師についての考えは大きく変化した。

その時の受け持ち患者さんは胃ろうを取り付け、意思疎通の難しい方だった。加えて、寝たきりであったために一人でトイレに行くことも出来ない方だった。そのために下の世話を必要としていて、今回はその現場を見させて頂くことになった。手早くおむつを換えてゆく看護師さんを見て、病院で初めて出会った患者さんの下の世話をすると大変なことだなと思いつつ、同時に少し汚いなとも思ってしまった。そして、おむつの交換が終わり病室を出ると、看護師さんは私にこう言ったのだ。

「今見てどうだった？ 患者さんは凄く恥ずかしいだろうから早く終わらせなきゃね」と。私はこの言葉を聞いた時、患者さんのかの字もないただの傍観者となっていたことに気づいた。また、汚いと思った自分を恥ずかしいなとも思った。そしてどうしてそんなに看護師さんが手早くやっていたのかに気づき、やさしさとは相手のために動くだけでなく相手の気持ちをまず考えることなのかなと思った。

この数分の間に、私は自分の考えを改めさせられた気がしてならなかった。もし、その時にどのような看護師になりたいかと問われれば、

間違ひなく患者さんの気持ちを考えて行動できる看護師になりたい、と答えただろう。今でもこの思いは持ち続けている。

この体験から一年が経ち、高校二年生になった私は再び看護体験に参加した。その時はストーマ、つまり人工肛門を付けた患者さんを受け持った。ちょうどストーマの処理をする時であり、私は病室にいるべきなのかと思ったその時、患者さんが、

「良いのよ。勉強のために全て見ていきなさい」

とおっしゃった。私はこの時、自らの恥を捨てて見ず知らずの高校生にその様なことを言えるのはどうしてなのかと思った。患者さんは恥ずかしいだろうな、と思いながらこれもまたやさしさなのだろうと私は思った。一年前の私なら、このやさしさを理解できなかったであろう。決して綺麗事ではなかったが、不思議と汚いとは思わなかった。

今回の看護師さんの場合は手早くではなく、ゆっくりとコミュニケーションをとりながらストーマの処理をしている印象を受けた。患者さんが看護師さんに悩みを打ち明けていたようだ。患者さんが話し終えた後、聞いてもらってスッキリしたとおっしゃっていたあの清しい笑顔は今でも忘れられない。病室を出た後、看護師さんは、

「あややつて話を聞くのも私は仕事だと思っている」

とおっしゃって、またすぐに次の仕事に取りかかった。なるほど、その通りだなと思いつつ話し上手は聞き上手という諺を思い出した。親身になって、ただ話を聞くこともやさしさであることに改めて気づかされた。

今までの看護体験で学び、受けてきた多くのやさしさを私は看護師として違った形で社会に還元し、貢献したいと考えている。